



Title	有対自他動詞の類型性から見た派生過程の考察
Author(s)	小池, 康
Citation	日本語・日本文化研究. 2018, 28, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/71145">https://hdl.handle.net/11094/71145</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 有対自他動詞の類型性から見た派生過程の考察

小池 康

## 1. はじめに

本稿は、ペアとなる動詞を有する自動詞もしくは他動詞（以下「有対自他動詞」と呼ぶ）に関して、その形式的な共通性より動詞を類型化し、各型の特徴や相互の関連性を観察することにより、有対自他動詞形成の過程の特徴を浮かび上がらせることを目的とする。

まず次節では形式的な側面からアプローチした有対自他動詞の先行研究を概観し、3節で本論を述べる。

## 2. 形式的類型化の先行研究

現代日本語の自他動詞を形式的に類型化した先行研究としては、佐久間（1951）、西尾（1954）、島田（1979）、Ueno（1988）、森田（1994）、金谷（2002）、小柳（2008）、バルデシほか（2015）などが挙げられる。このうち、本稿と特に関連の強い先行研究として佐久間（1951,1983）、島田（1979）、金谷（2002）を概観する。

佐久間（1951）は、現代日本語を対象にして、有対自他動詞の対応のタイプを分類したものとしては、研究史の上で早い時期のものである（須賀・早津 1995）。

佐久間（1983：118-119）では、「動詞をその語尾の如何によって形態上から」「暫定的な分類を試みた」ものとして、以下のような分類を提示している<sup>[\*1]</sup>。（語例は記載されているものの一部である。）

(1) <エル> 対 <ウ>

(イ) エル／ウ

裂ける／裂く 剥げる／剥ぐ 知れる／知る よじれる／よじる

※これに準じるもの：聞こえる／聞く 煮える／煮る 見える／見る

(ロ) ウ／エル

附く／附ける 立つ／立てる 込む／込める 浮かぶ／浮かべる

(2) <アル> 対 <ウ>

塞がる／塞ぐ 刺さる／刺す くるまる／くるむ

(3) <アル> 対 <エル> ※<ワル>対<エル>

掛かる／掛ける 当たる／当てる 締まる／締める 植わる／植える

浮く／浮かす 飛ぶ／飛ばす 澄む／澄ます 減る／減らす

(5) <ル> 対 <ス>

余る／余す 回る／廻す 通る／通す 残る／残す 帰る／帰す

(6) <イル> 対 <アス・オス>

生きる／生かす 閉じる／閉ざす 足りる／足す 落ちる／落とす

(7) <エル> 対 <アス>

明ける／明かす 焦げる／焦がす 覚める／覚ます 枯れる／枯らす

(8) <レル> 対 <ス>

蒸れる／蒸す 離れる／離す 崩れる／崩す 亂れる／乱す

(9) <エル> 対 <ヤス>

生える／生やす 殖える／殖やす 絶える／絶やす 肥える／肥やす

※これに準じるもの<エル> 対 <ス>：消える／消す 越える／越す

(10) 種々の自動詞の語根に< (ア) カス>をつけ他動詞とする。

寝る／寝かす (=ねせる) 甘える／甘やかす はぐれる／はぐらかす

(11) <ウ> 対 <エル> 対 <アス>

明く (自)・明ける (自・他)・明かす (他)

溶ける (自) / 溶く (他)・溶かす (他)

そして、佐久間 (1983: 137) では、(1)から(11)を踏まえ、形式的な関連性を図1のように

図式化した<sup>[\*2]</sup>。

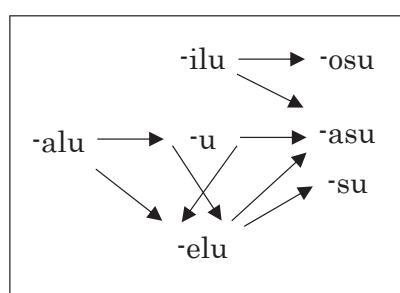


図1 佐久間 (1983) の自他動詞の対応

佐久間 (1983) によると、図1の矢印の方向は自動詞から他動詞への移行関係を示しており、-alu (アル) はいつも矢印の起点に、-asu (アス) はいつも矢印の終点になる。これより、-alu (アル) は「特に自動詞的」で、-asu (アス) は「特に他動詞的」であり、-u (ウ) と-elu (エル) は「対立の模様でどっちにもなる、相手次第でどちらかにきまる」ものとし

ている。

ただし、-alu（アル）が含まれていればすべて自動詞であるというわけではなく、自他動詞のペアがある場合に-alu（アル）は必ず自動詞の側にまわるとしている。だが、これにも例外があり、たとえ自他のペアがあつたとしても、「割る、遣る、叱る、計る」などのような-alu（アル）を含む他動詞もあると佐久間は述べている。

また、同様に-asu（アス）についているからといってすべてが他動詞になるとは言えず、「増す、差す、きざす、根ざす」などのような自動詞があることを指摘している<sup>[\*3]</sup>。

畢竟、佐久間（1951,1983）は、自動詞と他動詞の対立を語法的に整理すると共に、そこに含まれる関連性を、不完全な部分を残しているとは言え、図1のように統括しようとしたものであり、また自動詞と他動詞を音韻的な要素で理解しようとした点など、自他動詞の認識について新たな展開を示したものと言える（島田 1979 : 460）。

次に、島田（1979 : 617-647）では、別表として『当用漢字音訓表』の音訓欄に掲げられた動詞の『自他の対応』として、1057語の動詞を分類している。そこでは、動詞を、下掲の六つのカテゴリーに分けている。なお、2語で一対なので、特にI～IVのペアの数は表示の語数の半数である点に留意されたい。なお、カテゴリーが多いので、紙幅の都合上「延言」以外の語例は割愛する。

#### 「I. 活用語尾による対応」(128語)

- |                         |                        |
|-------------------------|------------------------|
| 1. る ru／す su (58語)      | 2. れる reru／す su (32語)  |
| 3. る ru／せる seru (8語)    | 4. りる riru／す su (4語)   |
| 5. エる eru／す su (2語)     | 6. える eru／す su (8語)    |
| 7. える eru／イる iru (4語)   | 8. える eru／せる seru (2語) |
| 9. う u／す su (2語)        | 10. る ru／える eru (2語)   |
| 11. イる iru／せる seru (6語) |                        |

#### 「II. 活用型による対応」(120語)

- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| 1. 五段活用／下一段活用 (82語) | 2. 下一段活用／五段活用 (34語) |
| 3. 上一段活用／下一段活用 (4語) |                     |

#### 「III. 基本形とその派生形の対応」(66語)

- |                |                |
|----------------|----------------|
| 1. u／asu (48語) | 2. u／osu (2語)  |
| 3. aru／u (6語)  | 4. oru／u (2語)  |
| 5. eru／u (6語)  | 6. u／seru (2語) |

#### 「IV. 派生形相互の対応」(248語)

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| 1. aru／eru (140語) | 2. eru／asu (76語) |
|-------------------|------------------|

3. iru／asu (16語)      4. iru／usu (2語)  
 5. iru／osu (14語)

「V. 延言」af (22語)；かたる→かたらう、すむ→すまう、はかる→はからう

「VI. 対応する語を持たないもの」(473語)

1. 活用が同じで、自動詞にも他動詞にも用いられるもの (43語)
2. 自動詞として用いられるもの (148語)
3. 他動詞として用いられるもの (282語)

島田（1979）は、自他動詞のリストとしては最も語数が多く網羅的なものと言える<sup>[\*4]</sup>。その点では評価されるものであるが、たとえばI～VIは、項目名を見てもわかるように異なる基準により立項されているため、たとえば自動詞「欠ける」と他動詞「欠く・欠かす」の対応がどこに位置づけられているのか、すぐにはわかりづらくなっている（「欠ける／欠く」はIIの2にあるが、「欠かす」はリストに無い）。また、それと共に、IならIの各カテゴリ一間にどのような関連性があるのか等についても記述がないため、その活用語尾による対応が何を意味しているのかが不明であることもやや物足りなさを感じてしまう。

最後に、金谷（2002：215）は、有対自他動詞と受身形および使役形の形式的連続性を認め、図2を提示している。

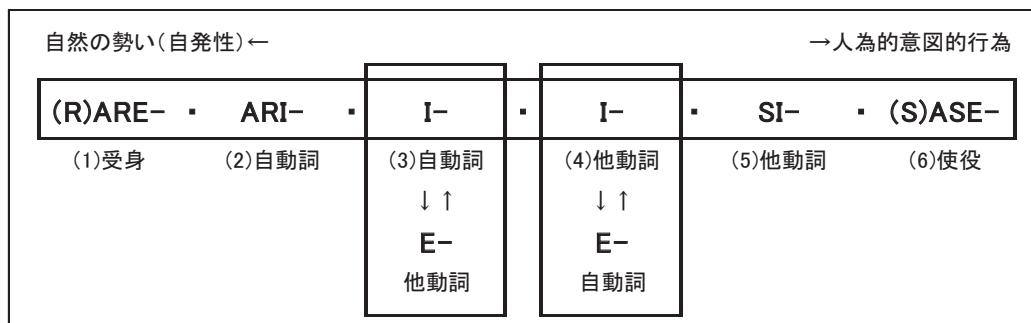


図2 金谷（2002）の有対自他動詞および受身形・使役形の関係図

図2は、動詞の連用形活用語尾を訓令式ローマ字で表示している<sup>[\*5]</sup>。たとえば、(3)は「自動詞 I- ⇌ 他動詞 E-」となっているが、これは自動詞「立ちます tati-masu」と他動詞「立てます tate-masu」の下線部の [i] と [e] の対応関係を示している。逆に(4)は「自動詞 E- ⇌ 他動詞 I-」となっているが、これは自動詞「焼けます yake-masu」と他動詞「焼きます yaki-masu」の下線部の対応関係を示している。

そして、金谷（2002：210）は、この(3)と(4)のように、連用形で語幹に I- がつくという点

では共通する動詞であるのに、「立ち」は自動詞になり、「焼き」は他動詞になるという語形的な不同一性がそれまでの自他の体系的理解を阻んできた要因と見なしている<sup>[\*6]</sup>。そこで、金谷は(3)と(4)のそれぞれに含まれる下記の語を挙げ、これらの語群の意味特徴を分析した。

(下掲は「自動詞／他動詞」の連用形)

- (3) 育ち／育て、縮み／縮め、開（あ）き／開け
- (4) 切れ／切り、破れ／破り、割れ／割り、折れ／折り、脱げ／脱ぎ

その結果、(3)の語群は「内部の『変化・成長』」(金谷 2002: 215) を意味するのに対し、(4)の語群は「外部に対する『破壊性』」(金谷 2002: 214) を意味しているとする。

この金谷(2002)で提示された図2の、特に(3)と(4)に関する考察は、同じ語形タイプであるのに、一方では〔自動詞—他動詞〕の関係となり、他方では〔他動詞—自動詞〕の関係になるという現象に対する解答・解釈を示したものとして示唆的であると言える。

### 3. 有対自他動詞の形式的タイプ

#### 3.1. タイプの概要

本節では金谷(2002)の分析を参考にして、さらに動詞の形式的な共通性に視点を置いた分析を行なう。

有対自他動詞を形式的な共通性から分類すると、大きく九つのタイプに分けられる。

表1(次頁)は、有対自他動詞の連用形活用語尾を基に、同一の形式的タイプを持つ動詞を分類したものである。たとえば、タイプ①〔自動詞: -ari／他動詞: -i〕の自動詞「刺さる」と他動詞「刺す」を例にして説明すると、これらの連用形は「刺さります sas-ari-masu」と「刺します sas-i-masu」<sup>[\*7]</sup>になり、語幹は〔sas〕と共通だが、活用語尾はそれぞれ〔ari〕〔i〕と異なっている。そして、語幹はまったく同じで、活用語尾のみが異なっていることこそが、この有対自他動詞を形式的に区別している根幹的な部分であり、その部分を〔-ari／-i〕と表示しているのである。そして、この①のタイプと同じ構成を持つ他の動詞の例として、「掴まる：掴まります tukam-ari-masu／掴む：掴みます tukam-i-masu」や「繋がる：tunag-ari-masu／繋ぐ：tunag-i-masu」を挙げているのである。いずれも語幹は同一で、活用語尾が〔-ari／-i〕の対立を持っている。

なぜ動詞連用形の活用語尾に基づく分類をしたのかというと、終止形でタイプを設定した場合、タイプ⑧をさらに二つに分ける必要が出てくるためである。

連用形活用語尾で表示した場合は下記のように [-i／-asi] の一つのタイプで共通させて表示できる。

- 散ります tir-i- / 散らします tir-asi- (*masu* は省略)
- 飛びます tob-i- / 飛ばします tob-asi-
- 閉じます toz-i- / 閉ざします toz-asi-
- 伸びます nob-i- / 伸ばします nob-asi-

例	自動詞	他動詞	例
① 合わさる、刺さる、掴まる、繋がる、はさまる	-ari	-i	合わす、刺す、掴む、繋ぐ、はさむ
② 上がる、当たる、合わさる、重なる、変わる、決まる、混ざる、見つかる、横たわる		-e	上げる、当てる、合わせる、重ねる、変える、決める、混ぜる、見つける、横たえる
③ 開く、浮かぶ、片付く、苦しむ、進む、育つ、揃う、立つ、並ぶ	-i	-e	開ける、浮かべる、片付ける、苦しめる、進める、育てる、揃える、立てる、並べる
④ 売れる、欠ける、切れる、碎ける、知れる、取れる、ほどける、焼ける、破れる、割れる	-e	-i	売る、欠く、切る、碎く、知る、取る、ほどく、焼く、破る、割る
⑤ 切れる、焦げる、それる、出る、溶ける、逃げる、濡れる、搖れる／増える、燃える	-e	-asi	切らす、焦がす、そらす、出す、溶かす、逃がす、濡らす、搖らす／増やす、燃やす
⑥ 現われる、隠れる、こぼれる、壊れる、流れる、離れる、乱れる、蒸れる、よごれる	-re	-si	現わす、隠す、こぼす、壊す、流す、離す、乱す、蒸す、よごす
⑦ 起こる、転がる、散らかる、通る、なおる、濁る、残る、ひたる、回る、戻る、渡る	-ri		起こす、転がす、散らかす、通す、なおす、濁す、残す、ひたす、回す、戻す、渡す
⑧ 散る、飛ぶ、悩む、減る、沸く／合う、笑う／閉じる、伸びる	-i	-asi	散らす、飛ばす、悩ます、減らす、沸かす／合わす、笑わす／閉ざす、伸びる
⑨ 起きる、落ちる、降りる、滅びる		-osi	起こす、落とす、降ろす、滅ぼす

表1 有対自他動詞（連用形活用語尾）の形式的タイプ

しかし、終止形活用語尾で表示した場合、他動詞は [-asu] で共通して表示できるが、自動詞は [-u] と [-iru] の二種類の設定が必要となる。

- |                     |   |                     |
|---------------------|---|---------------------|
| 散る tir- <u>u</u>    | ／ | 散らす tir- <u>asu</u> |
| 飛ぶ tob- <u>u</u>    | ／ | 飛ばす tob- <u>asu</u> |
| 閉じる toz- <u>iru</u> | ／ | 閉ざす toz- <u>asu</u> |
| 伸びる nob- <u>iru</u> | ／ | 伸びる nob- <u>asu</u> |

要は自動詞が五段動詞か一段動詞かの違いに起因するのであるが、本稿では連用形活用語尾での表示の方が規則数（設定数）が減ることから、こちらの表示法を採った。ただ、表1の「例」では、分かりやすさを考慮し、終止形での表示とした。

以下、この他の表1の留意点について、いくつか説明をしておきたい。

まず、表1ではタイプ③とタイプ④が太い枠線で囲まれている。

③は自動詞連用形が [-i] ／他動詞連用形が [-e] なのに対し、④は自動詞が [-e] ／他動詞が [-i] となっている。つまり、ここは活用語尾の形式は同じであるのに、自他が逆になっているのである（二つの線が交差している部分）。具体例を以下に挙げる。

タイプ③ [-i／-e] (ローマ字表示は連用形活用語尾、*masu* は省略。以下同)

開く ak-i-／開ける ak-e-	浮かぶ ukab-i-／浮かべる ukab-e-
進む susum-i-／進める susum-e-	立つ tat-i-／立てる tat-e-

タイプ④ [-e／-i]

売れる ur-e-／売る ur-i-	欠ける kak-e-／欠く kak-i-
取れる tor-e-／取る tor-i-	焼ける yak-e-／焼く yak-i-

表1では、この対称関係にある③と④を基に、まずタイプ④と同じく、自動詞連用形は [-e] になるが他動詞連用形は [-i] にはならない動詞をタイプ⑤と設定した。さらに、自動詞連用形が [-re] で示される動詞をタイプ⑥とした。これは [-re] には、タイプ④や⑤の [e] が含まれていること、およびそれが自動詞に現われることから、この位置に設定した。さらに、⑤と⑥の自動詞のペアとなる他動詞の連用形はいずれも [-si] を含む動詞であったため、それらはタイプ⑦～⑨—タイプ⑦は [-ri／-si]、タイプ⑧は [-i／-asi]、タイプ⑨は [-i／-osi] —とした。

一方、タイプ③と同じく、他動詞連用形が [-e] になる動詞をタイプ②に位置づけた。そして、タイプ②の自動詞連用形は [-ari] であったので、同じ [-ari] を持つ自動詞で、他動詞が [-i] ではないペアをタイプ①に設定した。

表1における九つのタイプの配列は、以上の理由による。

なお、表1の「例」の中にスラッシュ (/) で仕切られた箇所がある。これは、同じ活用語尾を持つが他とは異なるふるまいを見せる動詞を区別して示そうとしたものである。たとえば、タイプ⑤は

切れる kir-e-／切らす kir-asi- 焦げる kog-e-／焦がす kog-asi-  
などのように [-e／-asi] タイプだが、同タイプの  
増える hu-e-／増やす hu-yasi- 燃える mo-e-／燃やす mo-yasi-  
などでは、他動詞の活用語尾に [y] が挿入される。このような異なるふるまいを見せるので、スラッシュで分けて提示したのである。

一方、タイプ⑧は、

散る tir-i-／散らす tir-asi- 飛ぶ tob-i-／飛ばす tob-asi-  
のように [-i／-asi] だが、

合う a-i-／合わす a-wasi- 笑う wara-i-／笑わす wara-wasi-

は他動詞の活用語尾に [w] が挿入される点で、「散る」や「飛ぶ」とは異なる。よって、スラッシュで分けて表示した。さらに、既述の通り、「散る、飛ぶ」などの自動詞が五段動詞のグループと「閉じる・伸びる」などの一段動詞のグループは、連用形活用語尾は同一だが終止形活用語尾（太字下線部）は異なっている。

【自動詞が五段動詞のグループ】

散る tir- <b>u</b> ・散ります tir-i-	/	散らす tir-asu・散らします tir-asi-
飛ぶ tob- <b>u</b> ・飛びます tob-i-	/	飛ばす tob-asu・飛ばします tob-asi-

【自動詞が一段動詞のグループ】

閉じる toz- <b>iru</b> ・閉じます toz-i-	/	閉ざす toz-asu・閉ざします toz-asi-
伸びる nob- <b>iru</b> ・伸びます nob-i-	/	伸びます nob-asu・伸びます nob-asi-

この点も踏まえて、タイプ⑧は二つのスラッシュで区別されているのである。

次の表1の留意点としては、タイプ①の例に「合わさる／合わす」があり、タイプ②には「合わさる／合わせる」がある。さらに、タイプ⑧にも「合う／合わす」がある。

これらは、有対自他動詞の中には一つの自動詞が二つの他動詞とペアになる場合があるので、これらは複数のタイプに分類されることになる<sup>[\*8]</sup>。他にも、下記の動詞の例がある（表1の例に含まれていない動詞も挙げておく）。

自動詞	/	他動詞
繋がる tunag-ari-	/	繋ぐ tunag-i- (①)・繋げる tunag-e- (②)
くるまる kurum-ari-	/	くるむ kurum-i- (①)・くるめる kurum-e- (②)
蒸れる mu-r-e-	/	蒸らす mu-r-asi- (⑤)・蒸す mu-si- (⑥)

なお、タイプ⑧に「閉じる／閉ざす」があるが、「閉じる」は、他動詞「閉ざす」とペアになると共に「閉じる」自体も他動詞としての用法がある自他同形動詞でもある；ドアが閉じる／ドアを閉じる、ドアを閉ざす。本稿では、形式的な違いとなって現われている「閉じる／閉ざす」をペアとして設定した。

以上が、表1の見方の概略であるが、表1では紙面の都合上、一部の動詞例しか挙げていない。各タイプに該当する動詞の一覧表は「参考資料1」として本稿末に掲げてあるので、そちらを参照していただきたい。

また、表1のタイプがすべての有対自他動詞を網羅しているわけではないことにも留意願いたい。たとえば、

乗る no-ri-/乗せる no-se-      寄る yo-ri-/寄せる yo-se-  
は [-ri/-se] というタイプでまとめることはできるが、該当する動詞はこの2語のみのようなので、表1ではタイプの一つとしては設定しなかった。

また、「寝る／寝かす」は、一見タイプ⑤ [-e/-asi] と混同しがちになるが、語幹は「寝る ne-masu／寝かす ne-kasi-masu」と自他で異なっているので、タイプ⑤には該当しない。このタイプは、「寝る／寝かす」のみである。同様に、「消える／消す」も「消える kie-masu／消す kesi-masu」なので、表1のいずれのタイプにも該当しない。

このような1～2例しか該当する動詞が存在しないタイプについては、「参考資料2」として提示しておいたので、併せてご参照願いたい。

### 3.2. 特徴的なふるまいを見せるタイプ

#### 3.2.1. タイプ③とタイプ④の比較

表1ではタイプ③とタイプ④が対称的な位置を占めており、この不同一性が有対自他動詞の語形的な混乱を招くものと見なせることについては先述した通りである。そこで、この対称性が何を意味しているのかを考えてみたい。

まずは、タイプ③とタイプ④に属する動詞を提示する（五十音順、「参考資料1」参照）。

##### 【タイプ③ [-i/-e] の動詞】

赤らむ／赤らめる、開く／開ける、痛む／痛める、浮かぶ／浮かべる、かがむ／かがめる、かしぐ／かしげる、片付く／片付ける、傾く／傾ける、叶う／叶える、絡む／絡める、苦しむ／苦しめる、込む／込める、沈む／沈める、従う／従える、しりぞく／しりぞける、すくむ／すくめる、進む／進める、すぼむ／すぼめる、添う／添える、育つ／育てる、\*背く／背ける、揃う／揃える、たがう／たがえる、立つ／立てる、たわむ／たわめる、近づく／近づける、縮む／縮める、つく（付・点）／つける、続く／続ける、どく／どける、届く／届ける、整う／整える、並ぶ／並べる、のく（退）／のける、潜む／潜める、伏す／伏せる、向かう／向かえる、向く／向ける、休む／休める、和らぐ／和らげる、歪む／歪める、緩む／緩める

##### 【タイプ④ [-e/-i] の動詞】

売れる／売る、えぐれる／えぐる、折れる／折る、欠ける／欠く、\*かぶれる／かぶる、切れる／切る、くじける／くじく、碎ける／碎く、削れる／削る、裂ける／裂く、さばける／さばく、知れる／知る、擦れる／擦る、そげる／そぐ、炊ける／炊く、つれる（釣・吊）／つる、とける（溶・解）／とく、取れる／取る、抜ける／抜く、脱げる／脱ぐ、ねじれる／ねじる、剥げる／剥ぐ、はじける／はじく、\*引ける／引く、ひらける／ひらく、振れる／振る、ほどける／ほどく、むける／むく、まくれる／まくる、めくれる／めくる、もげる／もぐ、\*持てる／持つ、もめる／もむ、焼ける／焼く、破れる／破る、よじれる／よじる、割れる／割る

このうち\*が付いたペアは、自他で意味の対応が変わってしまうものである。たとえば、タイプ③の「赤らむ／赤らめる」であったら、「太郎は頬が赤らんだ／太郎は頬を赤らめた」のように、同一の事態を有対自他動詞の両方で表わすことができるが、「背く・背ける」では「太郎は家族の期待に背いた／\*太郎は家族の期待を背けた」「\*太郎は顔が背いた／太郎は顔を背けた」と、同一の事態を有対自他動詞の両方の動詞で表わすことができない。この

点で、語形的な対応関係は認められるのでリストには記載できるものの、意味的には異なる点に注意しなければならない。

さて、タイプ③とタイプ④の動詞を比較してみると、これら両タイプの動詞は連用形活用語尾が [-i] と [-e] という一つの音素の違いとなっているが、終止形で比較した場合、音節数に相違があることがわかる。すなわち、タイプ③では、「赤らむ／赤らめる」「開く／開ける」「痛む／痛める」などのように、自動詞の方が他動詞よりも少数の音節数から構成されており、逆にタイプ④では、「売れる／売る」「えぐれる／えぐる」「折れる／折る」などのように、他動詞の方が自動詞よりも少数の音節数でできていることがわかる。

さて、島田（1979：598）では、有対自他動詞は、基本になる「基本形」とその動詞の語根に他動詞もしくは自動詞を作る接辞が添加することによってできた「派生形」より構成されると述べている。

(自動詞)		(他動詞)
悩む	+	as
<u>Nayamu</u>	他動詞を作る接辞	<u>Nayamasu</u>
語根		

(他動詞)		(自動詞)		(自動詞)
生む	+	ar	=	生まる → (下一段化) 生まれる
<u>Umu</u>	自動詞を作る接辞	<u>Umaru</u>		<u>Umareru</u>
語根				

上記の例では、自動詞「悩む」に他動詞を作る接辞 as が添加することによって他動詞「悩ます」が派生し、また他動詞「生む（産む）」に自動詞を作る接辞 ar が添加することによって結果的に自動詞「生まれる（産まれる）」が派生されたと説明する<sup>[\*9]</sup>。

この「基本形」<sup>[\*10]</sup>という概念に従うと、タイプ③では自動詞が、タイプ④では他動詞が基本形に該当することになる。

では、タイプ③とタイプ④で動詞の基本形が異なっているということは、何を意味するのであろうか。

まず、タイプ③にしろタイプ④にしろ、基本形が自他どちらか一方に偏っているということは、そのタイプに含まれる動詞の基本形に何らかの意味が共通して存在しているからだと仮定してみる。そこで、タイプ③とタイプ④を比較してみると、以下のような違いがあることがわかる。

タイプ③ 基本形は自動詞、連用形活用語尾は [-i]

タイプ④ 基本形は他動詞、連用形活用語尾は [-i]

つまり、活用語尾は同じだが、基本形が自他で異なっているのである。

さて、そもそも自動詞は“主体の意志の有無にかかわらず、動作・行為による進行・変化を表わす”ものであり、結果的に主体の存在が後景化されて、あたかも自発的もしくは自己完結的に動作や行為が進行し変化することを表わしていると言える。本稿では、これを＜自発的自己完結的な変化＞と名付けておく。一方の他動詞は、“主体が意志的に対象に働きかけることにより、対象（の状態）を変化させる動作・行為を表わす”と言える。本稿では、＜働きかけによる変化＞と名付けておく。

そうすると、タイプ③は＜自発的自己完結的な変化＞を意味特徴として持つ動詞が基本形になっているということであり、一方のタイプ④は＜働きかけによる変化＞を意味特徴として持つ動詞が基本形になっているということである。

さて、ここで金谷（2002）の指摘を見てみよう。金谷（2002）は、本稿でのタイプ③に該当する動詞は「内部の『変化・成長』」を意味し、タイプ④は「外部に対する『破壊性』」を意味すると述べている。

確かにタイプ④は「破壊性」とでも呼べる意味を含む動詞が多いように見える；折る、欠く、碎く、焼く、破る、割るなど。しかし、その一方で、「売る、知る、つる（釣・吊）、ひらく」などのように必ずしも「破壊性」を有するとは見られない動詞も含まれている。

そこで、タイプ④のすべて動詞に共通する意味を考えてみると、まず＜表面的な変形性＞というようなものが設定できそうである。たとえば、「折る、碎く、剥ぐ、破る、割る」などの動詞はすべて表面的に変形を加える（＝働きかける）行為である。この変形性が極限まで達すると「破壊」という行為になると思われる。

一方で、「破壊性」は認められない「売る、知る、つる、ひらく」などの動詞のうち、「知る、つる、ひらく」は、「表面的」という用語の妥当性はともかく“それまで存在しなかったものを存在するように変える”ということである。たとえば、「知る」なら“の中に存在しなかった情報を、存在する状態に変える”ということであるし、「つる（釣・吊）」ならば“それまで手元やその場に存在しなかった（魚や電灯などの）対象物を、糸や紐で垂れ下げることにより存在する状態に変える”と言える。「ひらく」は、「この鉄道により地方への流通路が開けた／この鉄道が地方への流通路を開いた」のように“今まで無かった状態から新たな状態を作り出す”という意味である。また、「売る」は“販売物（＝存在物）が（貨幣などとの交換により）無い状態に変わる”と言える。

このように、タイプ④は、＜破壊性＞という側面を持つ動詞も含むかたちで、＜表面的な変形性＞をその意味特徴を持つ動詞群と見た方が妥当であるように思われる。

次に、タイプ③について見ておこう。

タイプ③は基本形が自動詞ということから、そこに通底する意味特徴としては＜自発的自己完結的な変化＞であると言える。金谷（2002）でも「内部の『変化・成長』」を特徴として挙げている。確かに、「浮かぶ、苦しむ、育つ、揃う」などの例は“特に主体が働きかけることなく、そのような状態になっている”という意味で共通しているように見える。

ここで留意したいのは、タイプ④では「変形」をキーワードとしたが、「変形」とはあくまでも“そのもの自体の外的的（外形的）な形態が変わる（外的に形態を変える）”ということである。「折る、欠く、そぐ、脱ぐ、ほどく」などの動詞は、すべて外部からの働きかけによって、そのものの元の形態から外的な形が変わっているのである<sup>[\*11]</sup>。その点では、他動詞の意味特徴である＜働きかけによる変化＞を保持していると言える。

一方のタイプ③の「変化」は、“外的に形態が変わる（変形）”の意味も含むが、そのもの自体の形態は変わっていない場合も含まれる。「赤らむ、痛む、傾く、すくむ、伏す」などは、対象のあり方に変化は見られるが、そのもの自体が変形しているわけではない；「塔が傾いた」は、塔自体の変形を含意しない。その一方で、パタン③には「すぼむ、育つ、たわむ、縮む、歪む」などの「変形」を含意している例もある。しかし、これらの語はいずれも外部からの働きかけでその状態になったのではなく、内部の変化によってその状態になったという点では共通しており、それはまさしく自動詞の＜自発的自己完結的な変化＞を保持しているのである。

このようにして見ると、タイプ③は＜内的影響による自発的変化性＞と呼べるような共通した性質があり、タイプ④は＜外的影響による表面的変形性＞と名付けうる性質があると言える。これを自他との関連性で示すと、以下のようになる。

タイプ③=＜内的影響による自発的変化性＞≒自発的自己完結的 ≒自動詞性

タイプ④=＜外的影響による表面的変形性＞≒他者への働きかけ ≒他動詞性

以上をまとめると、連用形活用語尾が [-i] と [-e] で対立する動詞は以下の特徴を持つ。

1) [-i] が基本形となる（語形が短い）：パタン③は自動詞、パタン④は他動詞

2) 動詞の意味 タイプ③=＜内的影響による自発的変化性＞

                        タイプ④=＜外的影響による表面的変形性＞

### 3.2.2. 自動詞が [-e] のタイプと他動詞が [-e] のタイプ

前節ではタイプ③とタイプ④について考察を進めたが、タイプ④は自動詞の連用形活用語尾が [-e] という形式を取り点でタイプ⑤と共に通しており、タイプ③は他動詞の連用形活用語尾が [-e] を取る点でタイプ②と共にしている。

その一方で、基本形から見た場合、タイプ④は、連用形活用語尾の音節数が同数になってしまい（売れます／売ります）ので、代わりに終止形の音節数で比較すると「売れる／売る」となることから、音節数が少ない他動詞が基本形になる。逆に、タイプ⑤は連用形活用語尾の音節数より自動詞が基本形になる（切れます／切らします）。

一方、タイプ③は、連用形活用語尾は音節数が同じになる（開きます／開けます）ので、代わりに終止形の音節数より比べると、音節数が少ない自動詞が基本形になる（開く／開け

活用語尾 基本形	自動詞が-e	他動詞が-e
自動詞	パタン⑤	パタン③
他動詞	パタン④	パタン②

図3 タイプ②～⑤の基本形と活用語尾の関係

の点が共通し、どの点が異なっているのかを見していく。

### 3.2.2.1. タイプ④と⑤の比較—自動詞が [-e] のタイプ

タイプ⑤は、自動詞の連用形活用語尾に [-e] を持つ点でタイプ④と共通している。また、タイプ④は<外的影響による表面的変形性>という意味特徴であったことも留意しておいていただきたい。

さて、まずはタイプ⑤に該当する動詞を挙げる。なお、終止形表示にすると基本形が自他のどちらかということがわかりづらくなるので、便宜的に連用形の語幹で表示する。

#### 【タイプ⑤ [-e/-asi] の動詞】

明け/明かし、荒れ/荒らし、遅れ/遅らし、欠け/欠かし、枯れ/枯らし、切れ/切らし、肥え/肥やし、焦げ/焦がし、転げ/転がし、さめ(冷・覚)/さまし、じれ/じらし、透け/透かし、ずれ/ずらし、それ/そらし、垂れ/垂らし、出/出し、とけ(溶・解)/とかし、慣れ/慣らし、逃げ/逃がし、\*抜け/抜かし、濡れ/濡らし、剥げ/剥がし、化け/化かし、はれ(晴・腫)/はらし、ばれ/ばらし、ふくれ/ふくらし、ふやけ/ふやかし、ぼけ/ぼかし、ぼやけ/ぼやかし、紛れ/紛らし、負け/負かし、蒸れ/蒸らし、もれ/もらし、揺れ/揺らし

: (他動詞に[y]を挿入) 癒え/癒やし、絶え/絶やし、生え/生やし、冷え/冷や

し、増え/増やし、燃え/燃やし

: (他動詞に[w]を挿入) 震え/震わし

このリストを見ると、自動詞が基本形になっていることがわかる。

自動詞が基本形になっているということは、基本形に自動詞の特徴である<自発的自己完結的な変化>の要素が含まれていなければならない。そこでリストを見てみると、いずれも主体の意志の有無にかかわらない<変化>を表わしているようである。

たとえば、「太郎が次郎にトランプで負けた」のような場合、主体「太郎」が意図的に次郎に負けた場合にも言えるし、勝つつもりでいたのに負けたという場合にも言える。つまり、主体の意志性は不間になってしまい、意志の有無とは関係なく事態が生起(変化)したこと

る)。逆に、タイプ②では連用形活用語尾の音節数が少ない他動詞が基本形になる(上がります/上げます)。

以上を一覧にすると、図3となる(図内の「活用語尾」は連用形の活用語尾である)。

以下、本節ではタイプ⑤とタイプ②が、それぞれタイプ④、タイプ③とど

示している（“意図的に負ける”ということを明確にさせる場合は、「わざと」などの副詞を共起させなければならない）。

そしてタイプ⑤は、このような自動詞の典型的な意味を持つ一方で、「荒れる、欠ける、枯れる、肥える、焦げる、とける、濡れる、剥げる、化ける、ぼやける」などの動詞は＜表面的な変化性＞を持っているとも言える。この点で、タイプ④との共通性も残っていると見られる。ただ、タイプ⑤のすべての動詞が＜表面的変形性＞を持っているわけではない（遅れる、冷める、ばれる、ぼける、紛れる、など）。

また、パタン④に見られた＜外的な影響＞が介在しているとは必ずしも言い切れない；「視野がぼやける」などは、外的な働きかけによる影響があるとは感じられない。

これらの点で、タイプ⑤はタイプ④の特徴とはズレがあることがわかる。つまり、タイプ④を基準として考えるならば、タイプ⑤はタイプ④の要素も含みつつ、それ以外の要素も混じった語群から形成されているのだと言える。では、その異なる要素とは何か。

ここで、タイプ④とタイプ⑤の基本形について再掲しておくと、下記の通りとなる。

タイプ④…基本形=他動詞	派生形=自動詞
タイプ⑤…基本形=自動詞	派生形=他動詞

そして、そのタイプ⑤の派生形には、共通して [-asi] という接辞が含まれていることがわかる；切らし kirasi-、焦がし kogasi-、そらし sorasi-、増やし huyasi-など。

金谷（2002）では、[-si] を含む他動詞と [-e] を持つ他動詞と同一線上に位置づけた場合、前者の方が「人間の意図的な行為」を表わす方向に位置づけられる、つまり [-si] を持つ他動詞の方がより＜人為的意図的行為＞を表わすとしている。この指摘を参考にすれば、タイプ⑤の他動詞はタイプ④の他動詞と比べ、より人為性や意図性を明示するものとして生み出されたのかもしれない。

なお、タイプ④と⑤で自動詞が共通する語は、下記の4語である。

自動詞④⑤ [-e]	/	他動詞④ [-i]	他動詞⑤ [-asi]
欠ける	/	欠く	欠かす
切れる	/	切る	切らす
とける	/	とく	とかす
剥げる	/	剥ぐ	剥がす

そして、形式的に短い形式を基本形とし、その間にさまざまな接辞（音素）が挿入されて派生形が形成されるとするならば、以下のような派生過程が成立すると考えられる。

タイプ④他 [-i] → {タイプ④自=タイプ⑤自 [-e]} → タイプ⑤他 [-asi]

欠く	欠ける	欠かす
切る	切れる	切らす
とく	とける	とかす
剥ぐ	剥げる	剥がす

理屈から考えれば上記の流れになるとは考えられる<sup>[\*12]</sup>が、語史的な観点からの裏付けも必要なので、本稿では上記の提示にとどめておく。

### 3.2.2.2. タイプ③と②の比較—他動詞が [-e] のタイプ

タイプ③と②は他動詞の連用形活用語尾が [-e] を取る点で共通するが、基本形が、タイプ③では自動詞、タイプ②では他動詞になる点で異なっている。

まず、タイプ②に該当する動詞を提示しておく（表示は連用形語幹）。

#### 【タイプ② [-ari/-e] の動詞】

上がり／上げ、温まり／温め、当たり／当て、集まり／集め、改まり／改め、合わさり／合わせ、受かり／受け、薄まり／薄め、埋まり／埋め、うずまり／うずめ、植わり／植え、おさまり／おさめ、終わり／終え、かかり／かけ、重なり／重ね、固まり／固め、かぶさり／かぶせ、絡まり／絡め、変わり／変え、決まり／決め、清まり／清め、極まり／極め、くるまり／くるめ、加わり／加え、下がり／下げ、定まり／定め、静まり／静め、閉まり／閉め、すぼまり／すぼめ、据わり／据え、狭まり／狭め、せまり／せめ、備わり／備え、染まり／染め、高まり／高め、助かり／助け、\*携わり／携え、貯まり／貯め、縮まり／縮め、つかり（浸・漬）／つけ、伝わり／伝え、つづまり／つづめ、つとまり／つとめ、繋がり／繋げ、詰まり／詰め、強まり／強め、連なり／連ね、遠ざかり／遠ざけ、とどまり／とどめ、止まり／止め、のっかり／のっけ、始まり／始め、はまり／はめ、早まり／早め、広がり／広げ、広まり／広め、深まり／深め、ぶつかり／ぶつけ、隔たり／隔て、曲がり／曲げ、混ざり／混ぜ、交わり／交え、まとまり／まとめ、丸まり／丸め、見つかり／見つけ、もうかり／もうけ、休まり／休め、ゆだり／ゆで、緩まり／緩め、横たわり／横たえ、弱まり／弱め

いずれのペアも他動詞が基本形であるが、自動詞には [-ari] という接辞が含まれていることもポイントである。

3.2.1 でのタイプ③と④の検証において、自動詞には<自発的自己完結的な進行・変化>がある旨を述べたが、この [-ari] を含む自動詞は含まない自動詞に比べ、その自発性がより強い方向性に位置づけられるとされる（金谷 2002 : 215）。つまり、タイプ②に [-ari] が付加されたことで、より明示的に自発性が表わされるようになったものと考えられるので

ある<sup>[\*13]</sup>。

このように、タイプ②の自動詞は、タイプ③の自動詞よりも、より自発性が明示的に強調されている点で違いがあると考えられる。

さて、リストの中でタイプ③と②に共通して現われる他動詞と、それとペアになる自動詞は下記のものである。

自動詞② [-i]	自動詞③ [-ari]	/	他動詞②③ [-e]
絡む	絡まる	/	絡める
すぼむ	すぼまる	/	すぼめる
縮む	縮まる	/	縮める
休む	休まる	/	休める
緩む	緩まる	/	緩める

そして、基本形からの派生について考えてみると、以下のような流れが考えられる。

タイプ②自 [-i] → {タイプ②他=タイプ③他 [-e]}	→ タイプ③自 [-ari]
絡む (絡み)	絡める (絡め)
すぼむ (すぼみ)	すぼめる (すぼめ)
縮む (縮み)	縮める (縮め)
休む (休み)	休める (休め)
緩む (緩み)	緩まる (緩め)

ただ、このような派生の筋道は、各動詞を語史的に検証しなければならない<sup>[\*14]</sup>のは言うまでもないが、ここではその可能性を指摘しておきたい。

### 3.2.3. その他のタイプの特徴—タイプ①およびタイプ⑥～⑨—

ここまでではタイプ②～⑤について考察してきたが、本節ではそれ以外のタイプについて見ておく。ただ紙幅の都合上、現象の指摘にとどめる。

タイプ①は自動詞は、[-ari] という点でタイプ②と共通する。基本形は他動詞である；はさまる／はさむ、またがる／またぐなど。

自動詞「繋がる」が他動詞「繋ぐ①・繋げる②」の2タイプと対応している。

タイプ⑥とタイプ⑦は他動詞が [-si] で共通しており、さらに他動詞に [si] が含まれているタイプ⑤ [-e/-asi] との関連性も考えられる。自動詞は、⑥が [-re]、⑦が [-ri] となる。

タイプ⑥は、終止形の音節数より他動詞が基本形となる；現われる／現わす、隠れる／隠す、壊れる／壊す、など。他のタイプと共に通する動詞は以下のものがある。

- |           |          |          |
|-----------|----------|----------|
| ⑥剥がれる／剥がす | ④剥げる／剥ぐ  | ⑤剥げる／剥がす |
| ⑥蒸れる／蒸す   | ⑤蒸れる／蒸らす |          |

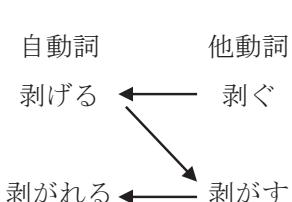


図4 「剥ぐ」の派生の流れ

このうち、「剥がれる／剥がす」関連の相互の関係を見てみると、タイプ⑥「剥がれる／剥がす」は他動詞「剥がす」が基本形となる。タイプ④「剥げる／剥ぐ」も他動詞「剥ぐ」が基本形となるが、タイプ⑤「剥げる／剥がす」は自動詞「剥げる」の方が基本形となる；剥げます／剥がします。これらを基本形の観点からまとめると、

剥ぐ {④他} → 剥げる {④自⑤自} → 剥がす {⑤他⑥他} → 剥がれる {⑦自}

という流れとなり、図4のように示すことができる（「剥ぐ」他の初出については注12を参照のこと）。

タイプ⑦は終止形も連用形もどちらも同じ音節数になるため、形式から基本形の設定はできない；起かる・起こり／起こす・起こし、散らかる・散らかり／散らかす・散らかし、回る・回り／回す・回し、など。また、共通して連用形活用語尾に [-i] を持つ。

終止形からも連用形からも基本形が設定できないのはこのタイプ⑦のみである。これがタイプ全体および自他動詞全体の中でどのような意味を持つのかについての考察は、今後の課題としておきたい。

タイプ⑧とタイプ⑨は、自動詞は [-i] で共通しているが、他動詞は⑧が [-asi]、⑨が [-osi] と異なる。いずれも自動詞が基本形である；⑧散る／散らす、減る／減らす、笑う／笑わす、伸びる（伸び）／伸びす（伸びし） | ⑨起きる（起き）／起こす（起こし）、下りる（下り）／下ろす（下ろし）、及ぶ／及ぼす、など。

なお、タイプ⑤から⑧までの他動詞はすべて [-si] を含んでいる点で、特徴的である。

#### 4. まとめ

本研究は、有対自他動詞を形式的な特徴から分類し、各タイプにどのような特徴があり、それが相互にどのような関連性を持っているのかを探り、さらに基本形から派生形への過程にはどのような流れが見られるのかを探るという目的で始めたものである。

本稿では、形式的なタイプとして九つのタイプを認め、その中でも対称的な位置づけにあるタイプ③ [-i/-e] とタイプ④ [-e/-i] を軸に、タイプ③と同じ活用語尾を持つタイプ②、およびタイプ④と同じ活用語尾を持つタイプ⑤を中心に考察を進めた。

連用形活用語尾 [-e] を基準にタイプ②～⑤の4タイプを見た場合、形式的な派生は以下

の流れに沿って進められてきた可能性が考えられる。

- |  |       |       |
|--|-------|-------|
| [基本形]  | [派生1] | [派生2] |
| $\alpha$ タイプ③自動詞 → {タイプ③他動詞=タイプ②他動詞} → タイプ②自動詞 |       |       |
| $\beta$ タイプ④他動詞 → {タイプ④自動詞=タイプ⑤自動詞} → タイプ⑤他動詞  |       |       |

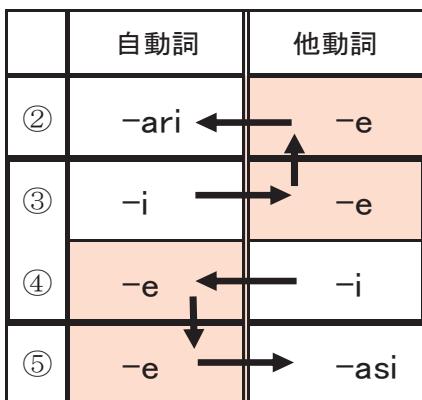


図5 タイプ②～⑤の派生の流れ

そして、これを図示したものが図5である。  
 $\alpha$  は3.2.2.2での「すぼむ、縮まる」の例を根拠とし、 $\beta$  は3.2.2.1での「欠く、切る」の例を根拠とする。

こうして見ると、対称的な位置を占めるタイプ③とタイプ④だが、いずれも基本形は連用形活用語尾が [-i] であり、それと対になる動詞は連用形活用語尾が [-e] になっている。そして、その活用語尾 [-e] は、タイプ③なら②と、タイプ④なら⑤といったように、隣接するタイプの自／他動詞と同一になっている。この隣接する

タイプ（②と⑤）内においては [-e] が基本形となり、タイプ②では [-ari] を、タイプ⑤では [-asi] を派生させている。そして、このタイプ②における [-ari] は自動詞の根本的な意味特徴である＜自発的自己完結的な変化＞の要素を示すマーカーとして、[-i] や [-e] よりも強く自動詞の性質を有していると考えられる。一方のタイプ⑤における [-asi] は、他動詞の根本的な意味特徴である＜働きかけによる変化＞を示すマーカーとして、同じく [-i] や [-e] よりも強く他動詞性を有していると考えられる。

西尾（1954）において、すでに他動詞 [-e] から自動詞 [-ari] が派生されるという分析はあった<sup>[\*15]</sup>が、本稿ではその派生の動態をさらに拡大した形で提示することができたと言える。

ただし、これらの関係性は語史的および文法史的な側面からの検討も必要であるので、それらは別稿に委ねたい。

## 5. おわりに

本研究のきっかけは、特に筆者の日本語教育経験において、有対自他動詞の形式的な対応関係について、どのようにしたら学習者により明示的に提示できるかということを探ろうとしたことから始まったものである。それゆえ、やや形式的な分類に力点を置きすぎた感があるかとも思う。

タイプの配列についても、本稿では自動詞 [-e] の共通性よりタイプ④と⑤を連続するものとして扱ったが、タイプ⑤はまた他動詞 [-asi] の共通性においてタイプ⑧とも通ずる。

タイプの配列のしかたによって、有対自他動詞に対してさまざまなアプローチが可能となるであろう。

また、本稿では現代語についての有対自他動詞の分類を試みたものであったが、そこには当然古語との関連性も考えなければならない。実際、古語における自他両用動詞として、タイプ③に該当する動詞の中では「開く、浮かぶ、育つ、立つ、並ぶ」などが、またタイプ④に該当する動詞の中では「欠く、切る、焼く、破る（ヤル）、割る」などがある。このような古語からの流れの中で、どのようにして現代語のタイプへと収斂していったのかを明らかにする必要もあるだろう。

さらに、自他動詞を考察する上では、受身形や使役形などのヴォイスとの関連も視野に入れなければならないが、本稿ではそこまでは言及できなかった。

これらいずれも今後の課題として漸次考察を進めていきたい。

## 注

\*1 視覚的な分かりやすさを考慮し、左項に自動詞、右項に他動詞となるよう修整した。また、序数はアラビア数字に改めた。

\*2 図1は、佐久間（1951）と佐久間（1983）で異なっている。本稿では、増補版である佐久間（1983）の図に従う。

\*3 島田（1979：456-457）では、佐久間の分類には「あう -u・あわせる -seru」「うまれる -eru・うむ -u」などの処理が明示されていない旨の批判がある。

\*4 バルデシほか（2015）にも489対（978語）の有対自他動詞の網羅的なリストが掲載されている。

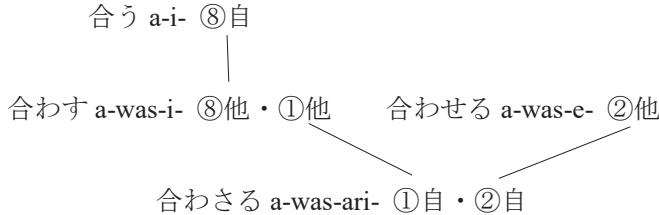
\*5 金谷（2002：207-208）では、語例を動詞の連用形で提示する理由を、①終止形には分析に不要な語尾がついて長くなるため、②連用形の用法が他の形に比べて遙かに多いため、③歴史的な考察が可能になるためとしている。

このうち①は、たとえば終止形「立つ tat-su／立てる tat-eru」では他動詞の方が語形が長いように見えてしまうが、連用形「立ちます tat̪i-masu／立てます tate-masu」で見れば、活用語尾（下線部）の「I-」と「E-」の母音同士の二項対立に還元できるからとしている。

\*6 さらには、日本語教育において自他動詞を習得する際に日本語学習者を惑わす要因の一つになっていると考えられる。

\*7 本稿では便宜的に訓令式ローマ字にて表示する。

\*8 自動詞「合う」（⑧）、「合わさる」（①・②）と他動詞「合わす」（①・⑧）、「合わせる」の関連を図示すると以下のようになる（ローマ字表示は連用形）。



なお、『日本語文法大辞典』（明治書院）によると、「江戸時代では、『あう』に『す』が接続した『あわす』から他動詞『あわせる』が生じ、更に、それに対応する自動詞『あわさる』が生じた」（「あう」の項、藤井俊博執筆、p.1）とある。

\*9 矢島（1995）によると、二段活用動詞の一段化は19世紀初頭ごろに完了したという。

\*10 ヤコブセン（1989：219）は、動詞の単独形（「無標識」）に形態素が加わり、より複雑で長い形になったものを「有標識」と呼ぶ。意味的にも無標識は「正常」の事態を表わすのに対し、有標識は比較的に「異常」な事態を表わすのが普通であるとしている。

\*11 ただし、「振る」や「持つ」のように「変形性」が想定できない動詞もある。

\*12 語の初出例が記載されている『日本国語大辞典』（精選版）より、タイプ④と⑤に共通して出てくる動詞4語の初出例の時期を見たところ、以下の通りであった（「C」は「世紀」を表わす。以下同）。

タイプ④他	→	{④自=⑤自}	→	⑤他
欠く (9C)		欠ける (8C)		欠かす (15C)
切る (8C)		切れる (8C)		切らす (16C)
とく (溶 10C、解 8C)		とける (溶 11C、解 8C)		とかす (19C)
剥ぐ (8C)		剥げる (10C)		剥がす (9C)

なお、「剥がれる」（タイプ⑥自動詞）の初出例は17Cであった。

\*13 例えば「上がる／上げる」は、古語では「上がる／上ぐ」がペアであった。この場合、他動詞「上ぐ（上げ）」が基本形となり、それに自発性強調辞としての〔-ari〕が付加することによって、自動詞「上がる（上がり）」が派生したと考えられる。

\*14 『日本国語大辞典』（精選版）によると、各語の初出例の時期は以下の通りである。

タイプ③自	→	{②他=③他}	→	②自
すぼむ (13C)		すぼめる (14C)		すぼまる (17C)
縮む (13C)		縮める (14C)		縮まる (15C)
休む (8C)		休める (8C)		休まる (8C)
緩む (17C)		緩める (13C)		緩まる (16C)

なお、「絡む・絡まる・絡める」については、(1)この3語の中で「絡まる」(②自)の初出例が最も古い(8C)こと、(2)「絡む」(③自)が自他同形語であり、自動詞は14C、他動詞は12Cが初出であること、(3)「絡める」(②③他)は13Cが初出であること、と上記の動詞の流れと大きく異なっている。

ただし、『日本語文法大辞典』によると、「絡まる」の例（上記の(1)）は『万葉集』に

1例見られるのみで、その後は江戸時代まで例は見られないという（「からまる・からむ・からめる」の項、佐々木文彦執筆、p.174）。

\*15 西尾（1954）では「<-eru>式他動詞」「<-aru>式自動詞」と終止形より分析をしている。

## 参考文献

- Ueno Yoshio (1988) "Morphological Alternations between Transitive and Intransitive Verbs in Japanese"、松田徳一郎・増田秀夫・高野嘉明編『小島義郎教授 還暦記念論文集』、研究社、pp.213-232
- ウェスリー・M. ヤコブセン (1989) 「他動詞とプロトタイプ論」、久野暉、柴谷方良編『日本語学の新展開』、くろしお出版、pp.213-248
- 金谷武洋 (2002) 『日本語に主語はいらない』、講談社
- 小柳 昇 (2008) 「自他動詞の派生対立の分類再考—自動詞と他動詞の両方に現われる『-er-』の位置づけ—」、『拓殖大学院言語教育研究』8、pp.143-158
- 佐久間鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法』、恒星社厚生閣
- 佐久間鼎 (1983) 『現代日本語の表現と語法《増補版》』、くろしお出版（佐久間 1951 の増補版）
- 島田昌彦 (1979) 『国語における自動詞と他動詞』、明治書院
- 須賀一好・早津恵美子 (1995) 「動詞の自他を見直すために」、須賀一好・早津恵美子編 (1995) 『動詞の自他』、ひつじ書房、pp.207-231
- 須賀一好・早津恵美子編 (1995) 『動詞の自他』、ひつじ書房
- 西尾寅弥 (1954) 「動詞の派生について—自他対立の型による—」、『国語学』17（須賀・早津編 (1995) 所収、pp.41-56）
- バルデシ プラシャント、桐生和幸、ナロック ハイコ編 (2015) 『有対動詞の通言語的研究』、くろしお出版
- 森田良行 (1995) 『動詞の意味論的文法研究』、明治書院
- 矢島正浩 (1995) 「近代の文法」、佐藤武義編著『概説日本語の歴史』、朝倉書店、pp.134-

## 参考資料 1 タイプ別の有対自他動詞対応表

## 参考資料2 タイプ①～⑨に含まれないタイプの有対自他動詞例

例	自動詞 (連用形)	他動詞 (連用形)	例
煮える、見える	-e	-	煮る、見る
積もる	-ori		積む
おぶさる	-sari		おぶさる
聞こえる	-oe	-i	聞く
生まれる、剥がれる	-are		生む、剥ぐ
潤う、賑わう	-i		潤す、賑やす
足りる	-ri	-si	足す
消える	-ie	-esi	消す
寝る	-	-kasi	寝かす
絶える	-e	-ti	絶つ
なくなる	-unari	-usu	なくす
まじる	-ri		まじえる
まじる	-iri		まぜる
こもる	-ori	-e	こめる
とらわれる、分かれる	-are		とらえる、分ける
埋もれる、うずもれる	-ore		埋める、うずめる
乗る、寄る	-ri		乗せる、寄せる
似る	-	-se	似せる

## &lt;参考資料に関する注&gt;

- 参考資料1は、基本形のマスに色を付けてある。
- 参考資料2は、他動詞の連用形活用語尾の共通性よりまとめた；i系 (i・si・ti) -u系 (su) -e系 (e・se)。他動詞語尾が同一の場合の自動詞の配列順もこれに準ずる。他動詞基準の配列にした理由は、自動詞の活用語尾の種類と比べると少數であり、そのぶん類型化しやすかったからである。
- 参考資料1、2の動詞は、佐久間（1951）、島田（1979）、Ueno（1988）、森田（1995）、バルデシほか（2015）に記載の動詞を参考に作成した。